



吉川英梨

前回、前々回と『感染捜査ノート』にお付き合いくださりありがとうございます。第23回より再び『海蝶ノート』に戻って執筆当時を振り返りたいと思います。

さて、2019年冬——ちょうどラグビーワールドカップも終わり、中国の方で謎の肺炎が流行っているらしいよ、なんてニュースが聞こえ始めてきたころ、いよいよ『海蝶』に本格的に取り掛かることになりました。

小説を作るとき、いちばん最初にやるのは参考文献を読み事前取材をして構想を練るのですが、新しいシリーズを作るときは必ず、出版社と事前打ち合わせをして、物語の方向性を決めます。一発目の打ち合わせと

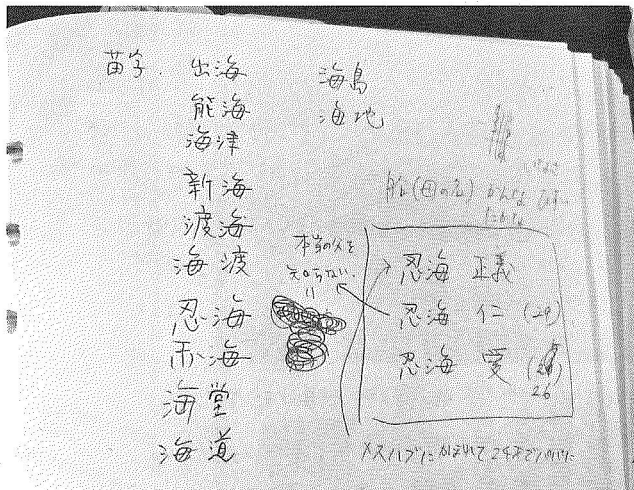
## 女性海上保安官がなぜ『海猿』を目指す？

ということで、講談社とエージェントの担当の他、火付け役でもある海上保安協会の宮野直昭常務理事にも同席していただきました。

「出版社の打ち合わせ？ 俺なんにもしゃべることないよ～」とおっしゃっていた宮野さんですが、いざ打ち合わせの席に入ると、編集担当もエージェントもそして私も(!?) 無口なタイプ、気が付けば海保について語る宮野さんの独壇場に。舞台は三管にすること、女性海上保安官が主人公であること、そして一般になじみが深い海猿、潜水士を目指す女性だという基本設定が決まりました。

さてここからは参考文献を片っ端から読みながら、アイデアを拾い、同時に主人公を中心とした登場人物たちの名前や生い立ちなどの基本設定、履歴書の作成に入ります。海上保安官一家であるという設定、名前が『正義仁愛』であることは既に

苦悶の跡の創作メモ。なかなか名前が決まらないう……



考えていたので、次に大事なのは苗字です。『海』がつく苗字にしたいと思っていたので、片っ端から『海』がつく苗字を並べていったところ、『海』がゲシュタルト崩壊しかけました(笑)。

そしてこの主人公一家がどう

いう海難事故を解決するのか、もともとミステリーは書きなれていたのですぐに決まったのですが、ここで大きな問題にぶちあたりました。

女性海上保安官が『海猿』を目指す……なぜ？

男性ですらよほどの運動神経

と体力がないと選抜されない潜水士、現場に入ったところで、そこには男しかいない、女がいたことがない。なぜそんな女性にとって過酷すぎる世界に自ら飛び込もうと思ったのか？

このあたり、リアルでは他人に説得力を持たせる動機はさほど重要ではなく、本人が「なりたいたいのだ」と言えばそれでいいと思うのですが、小説の主人公はそうはいきません。読者が「納得する」「共感する」動機がないと、主人公が独り歩きするだけで読者が感情移入できない、つまらない小説になってしまいます。

かっこいいから、親も兄も潜水士だから、自分が潜水士に助けられたことがあるから……？

どれも物語の中に置くにはしっくりきません。

さて『動機』が見つからない。私は初っ端から大きな壁にぶつかることになりました。

(つづく)

『動機』見つからず初っ端から大きな壁にぶつかることに